

『ロートレアモン』にみるガストン・ バシュラールの自画像

越坂部 則 道

もう何年も前のことになるが、パリの十六区にあるラジオ・フランスのライブラリーでガストン・バシュラールの肉声を聴いたことがある。

一つは、『空間の詩学』を出版したあと、ある番組でラジオのインタビューを受け、その内容を録音したテープである。「なぜ、精神分析的方法をはなれ、現象学的方法をとるのか」とか「なぜ、哲学の本と文学的な本を同時に出版するのか」といった質問に、バシュラールはていねいに、そして簡潔に答えていた。

もう一つは、いわゆるラジオ講座である。バシュラールは生前の一時期、ラジオ講座を担当していたらしく、その一部がテープで保存されていた。〈L'esprit scientifique〉を論じていたが、難解な内容で、当時の私にはほとんど理解できなかった、と記憶している。

三本目は1962年2月10日のインタビューである。彼は同年の10月6日に亡くなっており、これが最後の肉声となった。

バシュラールはフランス人にしては声の質が高く、とくに講義の朗読になると、かん高くなる。強いアクセント（シャンパーニュ訛り）と鼻に通った声が印象的だった。死ぬ八ヵ月前は、ことに声質が高く、むしろ外国人にとって聴きやすいフランス語だった。

そのかん高い声と方言が、トレードマークの白く長い顎ひげをたくわえた写真のバシュラールとは釣り合いがとれず、最初の頃はテープを聴きながら、ひとり悦に入ったものである。ことに方言をまじえながら「科学精神」を講義されると、その難解な内容がむしろ身近な問題になったような、妙な錯覚が生じた。

バシュラールに関して日頃から「夢想」だの「現象学」だの「四元素」だの「価値附加作用」だの、そんな硬い文字ばかり追いかけていたが、実際に彼の声を聴いたとき、その人間性に触れた思いがして、むしろホッとしたのをおぼえている。

「バシュラールという先生は現実にはどのような人柄だったのだろうか」、ある日、ふと、そのような素朴な疑問が胸のうちをよぎった。それは、彼の肉声を聴いて、しばらく経ってからだった。「どのような日常生活を送っていたのか」といった疑問は、彼の著作を読んでも、論文を読んでも、もちろん分からない。少なくとも、当時、そのように考えていたのは事実である。

しばらく前のことである。バシュラルの友人であり、弟子であったレスキュールの論文を読んで⁽¹⁾、バシュラルの文学評論とでも言うべき作品『ロートレアモン』がバシュラル自身の人生観のいわば裏返しであることを知った。レスキュールによれば、『ロートレアモン』はバシュラルの自画像の間接的表現なのである。

そこで、ここでは、もう一度『ロートレアモン』⁽²⁾を分析し直したいと思う。そして白い顎ひげの学者然とした、現実離れたイメージとは裏腹の、バシュラルの人生像を出来るかぎり具体的に描いてみたい。

まずはじめに、なぜ『ロートレアモン』なのか、という疑問からはじめる。

もともと『ロートレアモン』はバシュラルの想像力研究の著作のなかでは、むしろ特異な位置を占めていた。彼は想像力の四元素の研究から文学の世界に入ってゆくのだが、『火の精神分析』の二年後に出版された『ロートレアモン』は四元素の研究とはまったく無縁であった。

例えば『ロートレアモン』の結論で彼は非ロートレアモン主義⁽³⁾を提唱している。つまり、非ユークリッド幾何学⁽⁴⁾を提唱した科学認識論の構造と同じものを想像力研究にも求めたことになる。当時のバシュラルは、科学の軸と文学の軸が相補的に左右対象になっているとまだ考えていたのだろう。このことだけを取り上げてみても、『ロートレアモン』が他の想像力研究の著作とは一線を画すことが分かる。

それでは具体的に『ロートレアモン』のなかでバシュラルは何を求めているのだろうか。「全体の見通しによって問題を解決することができないので、われわれはそれをひっくり返そうとした。」⁽⁵⁾とあるように、彼はひとつの明確な問題意識をもって『マルドロールの歌』を分析する。作品全体を分析するのではなく、ある目的意識から本をいわば斜め読みするのである。

ところでこの「問題」とは何だろうか。それは、『マルドロールの歌』に登場する動物の数を統計的に処理するのではなく、動物の残虐さ(cruauté)を確認することによって、「ロートレアモンのコンプレックスが明確になる」⁽⁶⁾ことであった。コンプレックスの明確化とは、取りもなおさず著者の心理状態の分析であり、的確な表現を用いれば、イジドル・デュカスの精神分析である。二年前に出版した『火の精神分析』に対し、この作品を『デュカスの精神分析』としたならば、彼の意図がより正確に表現されるようになったかもしれない。

しかし、デュカスの精神分析をする場合、その資料はもちろん彼の作品をおいて他にない。「人生に何らかの光を当て、伝記の問題を解決するために、私たちが戻らなければならないのは、作品をじっくり考えることである」⁽⁷⁾と、彼自身述べたように、『マルドロールの歌』以外に分析の資料は何もない。それどころか、彼によると、著者の「伝記が言わないことを作品が歌っている」⁽⁸⁾のである。この時期のバシュラルは、作品を媒介させれば、著者の心理状態を白日の下に現像させることができると考えていたようである。

このような考え方には、コンプレックスという概念への一種の思い入れがあったものと思われる。

独創性とは必然的にひとつのコンプレックスであり、しかもコンプレックスは決して独創的ではない。……もし独創性が力強いならば、コンプレックスはエネルギーであり、皇帝のように堂々として、支配的である。そしてコンプレックスが人間を導き、作品を創る⁽⁹⁾。

この場合、「独創性」を例えば「個性」に置き換えると分かりやすい。

バシュラールによれば、個性の源泉はひとえにコンプレックスである。しかしここで重要なのは、コンプレックス自体が個性的なものではなく、それは万人に共通した精神構造だという点である。人間は誰しも、なんらかの形で似たようなコンプレックスを持っていることが多い。どちらかと言えば平等で、普遍的なこの精神構造がなぜ人間の個性を生むのか、それがコンプレックスの強度の問題なのである。

コンプレックスがあまりにも強いと、それはその人間の思考作用に影響を及ぼし、行動に関与し、その結果その人の個性の原動力となる。反対にコンプレックスが弱いと、それは間欠的にしかあらわれず、思考作用にも、行動にもほとんど影響を与えない。そして何事もなかったかのように、コンプレックスの収束がはかれるのである。

「非常に強いコンプレックスが人間を突き動かし、その人間に文学作品を創作させるのだ。」余分なことを切り捨てて、誤解をおそれず簡潔に要約してしまえば、そういうことになる。

したがって、文学作品の独自性を深めたいのであるならば、まず作者のコンプレックスを探り、その強度をはかることからはじめなければならない。「結局、文学批評はコンプレックスの心理学を深めようとするだろう。……そのために文学批評は読書を、精神分析的な意味での転移におきかえなければならないだろう。」⁽¹⁰⁾ 言うまでもなく、転移とは無意識的な願望がある種の対象に現実化されることを意味する。無意識的なものが姿をかえて表現され、何かに置き換えられて、ひとつの過程、ひとつの型になる。多くの場合精神分析治療の過程で、幼児期の原型が現実の世界に反復体験されることをいうが、バシュラールは、もちろん精神分析治療を行うわけではない。転移される前のもとの感情、置き換えが行われる前のもとの欲求を明らかにし、それによってコンプレックスの性質と強度をはかりたいのである。

コンプレックスが作品を創作させるのであるならば、願望や欲求が姿を変えて作品に満ちあふれている。そこは作者の感情転移の宝庫である。

本を読むということは、とりもなおさず、作者の感情が作品のどこに転移されているのか、どのような感情が転移されているのかを知ることである。それを分析するには読み手が作品に感情を投射することが必要である。つまり、こういうことである。作者のコンプレックスは何も作者

独自のものではなく、強い弱い程度の差こそあれ、読み手の側にも認められる精神構造であり、それだからこそ読み手が感情を投射することで、転移されたものを通して、作者の側に同じコンプレックスがあることを知ることができるのである。そして読み手の側は自分と比較することでコンプレックスの強弱さえ判断することができる。

このようなことが可能になるのは、ひとえに「コンプレックスが独創的でない」ところに由来する。同じ意識構造だからこそ、読み手が自分の体験、自分の感情、自分の意識を投射すれば、そこに作者の意図した転移をみとめることができるのである。言い換えるならば、読書とはコンプレックスの転移を追体験することに等しい。

この頃のバシュラールの想像力研究に体験や感情や意識の投射が多くみられるのは、このような理由によるものと思われる。例えば『火の精神分析』では、自分の体験から「内的な火」が「生命の火」であることを示す個所がいくつかある⁽¹¹⁾。

『ロートレアモン』からバシュラールの小学生時代の姿を描こうとしたレスキュールの根拠は、理論的にはこのように説明することができる。事実、イジドール・デュカスが行ったとされるコンプレックスの転移を仔細に検討してみると、多くの場合、それをそのままバシュラールの意識投射と考えてもさしつかえないだろう。少なくとも、そのように考えたほうが合理的だと思われる個所がたくさんあるのは事実である。つまりバシュラールの取り上げたコンプレックスのなかには、心理学的にみて明らかに学問上論拠のあるものもあれば、きわめて具体的な説明を伴うので学問上というよりは体験的な論拠といった方がよいようなものが数多く存在する、ということである。『ロートレアモン』の読者はそこにバシュラールの自画像をみることができるのである。

数多くある自画像のなかで、疑う余地のない、代表的なものをいくつか取り上げてみようと思う。

バシュラールが『マルドロールの歌』のなかに見たものは、何よりもまず攻撃性と残虐性に富む詩的表現だった。動物的生命の直線的な攻撃性と残虐性⁽¹²⁾が、彼に衝撃を与えた。そして、さまざまな動物が純粋な攻撃を加え、力学的な残虐を繰り返すことで、マルドロールという仮面の下に隠されたデュカスの暴力と反抗心というきわめて特殊な一面が浮かび上がってくることに注目した。これらの二つの衝動のせいで、『マルドロールの歌』という詩は作者の暴力と反抗心に変身したのである。あるいは逆に、作者の暴力と反抗心が『マルドロールの歌』に変身したというべきだろうか。いずれにしても、この暴力とか反抗心ということばほどバシュラールに似合わないものはない。「暴力」という単語を見ただけで、「おや！ 何かの伏線では……」と思わせるような雰囲気、哲学者の彼は持っている。

確かに、最終的にはデュカスのこの二つの特性から、結論部分で非ロートレアモン主義を提唱することになるのだが、しかしここではむしろ暴力と反抗心を肯定的に捉えているようだ。もち

ろん暴力そのものに賛成するとか、反抗心を是認するという意味ではない。詩のなかで、そういった強力な生に変身する願望、変身する幸福を彼は積極的に述べている⁽¹³⁾のである。変身願望は想像力を刺激する。変身の経験は生を緊張させ、そして生を幸福にする。

ところで、デュカスは詩のなかでなぜ暴力をふるい、何に対して反抗心を抱くのか。彼が本質的に粗暴な性格であったから、という解釈ならば、想像力の関与する余地はなにもない。そうではなくて、バシュラールの行った説明をきわめて簡潔明瞭に一言で表現すれば、「復讐」のため、ということが出来るだろう⁽¹⁴⁾。すなわち『マルドロールの歌』は復讐のドラマである。

この復讐ということばもバシュラールの持つ雰囲気にとぐわぬ。もともと想像力研究のなかで、彼は現実の社会にほとんど関心を示していない。彼の作品を読んでも当時の世相が見えてこないのである。例えば、四元素の締めくくりとなった作品『大地と休息の夢想』と『大地と意志の夢想』が出版されたのは第2次世界大戦が終了した後の1948年であった。まだ街中には戦争の傷痕が生々しく残り、人々の心のなかにも戦争の後遺症がはっきりと残っている時期であったにもかかわらず、彼の作品には戦争を思わせる暗い後遺症がまったくといってよいほどなかった。というより、つい数年前に戦争をしていたのが信じられないほど作品は明るい田園風景を語り、当時の社会に対しては無関心で、世相を反映していなかった。もちろん、個人的な意思についても同様である。「復讐」はもとより、例えば敵愾心、遺恨、怨念といった次元からはほど遠いところにバシュラールの想像力研究の世界がある、少なくともロートレアモン以外の作品からはそのように断定できるだろう。従って、バシュラールの心理学のなかで、暴力や復讐ということが大変意外な展開をみせたことになる。

ところで復讐するには相手がいる。誰に対する復讐なのか、という問題である。バシュラールが具体的に取り上げたデュカスの相手は、友だちであり、先生であり、よその学校の生徒であり、そして新人または下級生である⁽¹⁵⁾。とりわけ彼が暴力をふるう相手をバシュラールは二つに分けた。強者すなわち先生に対する復讐と弱者に対する暴力すなわち新人（下級生）いじめである。

まず第一に、先生は生徒に対して暴力をふるう。この場合、筋肉を使う暴力と精神的な暴力の二種類があり、もっとも影響力を与えるのが精神的暴力である。バシュラールによれば、先生が生徒に理性を押しつけることは、もっとも悪質な暴力であり、これは生徒に復讐心をうえつけることにつながる。先生に暴力をふるわれた生徒の心理学をもっと深めなければいけない、とバシュラールは言いたげである。先生によって上から頭をぐいぐいと押しえつけられ、その間、自己主張ができなかった個性的な生徒が、その学校を出た後、どれほどいままでの不満を爆発させたことだろうか、そこに『マルドロールの歌』の純粹なる攻撃性の一端をバシュラールは見ようとする。

彼のこの分析に彼自身の心理投射を見ることはあながち間違いとは言えないだろう。バシュラ

ール自身が故郷のバール＝シュル＝オーブの学校生活をどのように過ごしたのか、知る由もないが、18歳でコレージュを卒業したあと、郵便局に勤めながら10年後の28歳のときに独学で数学の学士を取得したところをみると、ガストン少年のコレージュ時代は内心忸怩たるものがあったにちがいない。先生は生徒に学問を押しつけてはいけないという戒めは、コレージュ時代の自分の体験から来た結論だったかもしれないし、『ロートレアモン』出版の当時、すでにディジョン大学の文学部教授だった自分への諫言だったかもしれない。少なくとも厳しくしつけを求める先生に対する執拗なまでの激しい敵対感情⁽¹⁶⁾には、ただ驚かされるばかりである。先生の厳しさを精神病と断定するところをみると、これは自分への皮肉というよりも、むしろ故郷のコレージュ時代への「復讐」といった意味合いの方が強いように思われる。

次は新人（下級生）いじめ“brimade”の問題である。バシュラルはこの非人間的な暴力を相当重要視していた。わずかな年齢の差が生み出す暴力ではあるが、この試練が後の社会生活に与える影響は計り知れない。このbrimadeの心理学に関する研究書がまったくないことを彼は嘆く⁽¹⁷⁾のである。

彼の簡単な分析によると、このいじめは二重の構造になっているようだ。まず、いじめる者といじめられる者とに分けられる。いじめる者は束の間の虚栄心をえることができるが、数時間後には先生の皮肉と毒矢で指し貫かれ、かえって手ひどい試練を受けることになる。これは前述した通り、先生の暴力につながって行く。束の間の勝利をえたため、反対に先生の敵意の対象となり、嘲笑や罰を受けて、「心のなかに筆舌に尽くしがたい遺恨をのこす」ことになる。下級生をいじめた結果、先生からいじめられ、それが遺恨となって後々まで残る、簡単に言ってしまうばそういうことである。いじめる側の心理状態を彼はこれほど微細にわたって述べたにもかかわらず、奇妙なことに、いじめられる者についての心理分析をほとんど行っていない。そしてもちろん、デュカスの復讐はいじめる側の論理から解釈されることになる。

『マルドロールの歌』を読んで、brimadeの結果生じた学校の悲しい時間の思い出だけがロートレアモンの涙を理解することができる⁽¹⁸⁾とバシュラルが断定したとき、そこに彼自身の心理投射を見なかったならば、おそらくバシュラルの解釈を誤解することになるだろう。デュカスの新入生いじめはバシュラルのいじめでもあり、デュカスの遺恨はバシュラルの遺恨に通じ、デュカスの復讐はバシュラルが育んだ復讐でもあった。ただバシュラルはデュカスのような復讐の形を選択しなかっただけである。先に述べたように、バシュラルはコレージュを出たあと独学で勉強をし、28歳で数学の学士を取得し、さらに驚くべきことにmath. spé.に進んで、自分自身が先生になる道を歩みはじめた。このとき不幸にして第1次世界大戦が勃発し、30歳という年齢で軍隊に動員された。そして35歳のとき、念願かなってようやく故郷のコレージュの先生になったのである。これがバシュラルの復讐の形だったといたら言い過ぎになるだろうか。ただ少なくとも、『ロートレアモン』を読むかぎり、「学校の悲しい時間の思い出」がその

後の彼を一念発起させたことは間違いない。

彼はデュカスという詩人の原点を学校教育のアンチ・テーゼのなかに求めた。

間違いをただす男の学校の名残を受け入れないで、ありあまるほどの書物に聞き入りながら、孤独のなかで、自分のことばを考えた人間は、あまりにもしあわせである⁽¹⁹⁾。

間違いを正す男とは、もちろんレトリックの先生のことである。この「しあわせ」は想像力研究へと進む自分自身の「しあわせ」と二重写しになっている。バシュラールの思想もまた学校教育の「否定」を出発点としているのかもしれない。

先生が生徒に加える暴力のうち、もっとも悪質なものは「理性の押しつけである」と先に述べたが、バシュラールの分析によると、デュカスの暴力の源となったコンプレックスのなかでもう一つ顕著なものを彼は示した。それが隠喩的な形で表現された去勢コンプレックスである。もう少し具体的に言うと、先生が生徒の頭髪を短くするように強制した結果、生徒の側に「頭皮をはがされた」(scalpé)コンプレックスが生まれたことである。彼によると、この作法の押しつけが性的な要素を伴った去勢コンプレックスに変わり、『マルドロールの歌』の全編にわたって影響を及ぼすようになる。例えば、髪の手への言及が多いことや頭皮をはがされた男の劣等感にさいなまれた悪夢などである。

この具体的に語られた scalpé の体験は、むしろ具体的すぎてバシュラールの心理投射以外の何ものにも見えない。おそらく当時のコレージュでは丸坊主頭（あるいは短髪）が強制されていたのであろう。そして彼自身も言及していたが、サルセイの手紙という事件があり、顎ひげもまた禁止されていたようである。日本の高校野球を絵に書いたような、丸坊主の画一的な集団、それがどちらかと言えば个性的で、感受性の強いフランス人の子供に強制されていたのは驚きであり、不思議な気がする。

この青春時代の悩みがバシュラールのその後の人生に多大な影響を及ぼしたものと思われる。学校生活で無理やり「頭皮をはがされた」ことへの復讐として、バシュラールはコレージュを卒業したあとに髪を伸ばし、ひげをたくわえるようになったのではないだろうか。あの独特な風貌の誕生である。Margolin の書いた『Bachelard』⁽²⁰⁾には、故郷パール＝シュル＝オーブでコレージュの教師をしていた1924年当時の写真がのっている。すでにぼさぼさの髪の毛で、長い顎ひげをたくわえていた。ただ晩年の写真と異なるのは髪の毛とひげが黒いことだけである。

「頭皮をはがされた」ことへの反発心、復讐心は、彼の心のなかで一般的に考えられる以上に強い感情となり、相当に根深い遺恨を残したようである。だからこそ『マルドロールの歌』のなかにある「髪の毛」のイメージに、あれほど執着したのだらうと思われる。

例えば、ボードレーが詩のなかで髪に触れるとき、多くの場合、女性の甘美な髪の毛を描写

したが、それはまた、美、官能、欲望の詩的イメージでもあった。同じ髪の毛でも『ロートレアモン』におけるバシュラールの描写は当然男の髪が対象であり、強制、挫折のイメージとして捉えられ、暴力と復讐の伏線となった。このような相違は「髪の毛」という物質への、あらかじめ付与された価値の違いによって生じた、と説明するより仕方ない。

バシュラールによれば、人は物質に固有の「無意識的な」価値を与えている。この価値に妨げられて、人はあるがまま客観的にその物質を認識することができないが、一方、この価値のおかげで、人はその物質を豊かに表現することができる。(無意識のうちに付与した)価値が障害にもなるし、詩的イメージの源泉にもなる、ということである。

ところで、『ロートレアモン』の目的の一つは、「わたしたちの人生とは異なった人生の、特定の動揺を復元しようと試み」⁽²¹⁾ることである。この「動揺の復元」には二つの方法がある。一つはデュカスの体験した不安を現実体験して、それをことばで復元する方法であり、もう一つは不安をいわば構造的に解明し、分析して復元する方法である。例えばバシュラールはポーの『ナンタケットのアーサー・ゴードン・ピムの冒険』を分析した際、マリー・ボナパルト夫人のことばを借りて、「ゴードン・ピムの水」に「血の水」という構造が隠されているのを解明したが、一方で同じ水が「母乳」にも復元される⁽²²⁾のである。これは詩的なイメージの美しさを詩人の想像力の次元にまで遡って分析したものであり、想像力の物質化の力動性、変動性の良き説明になっている。美しさの構造分析は配列の美、形態の美を語るものであり、一種の汎美主義と言えなくもない。

ここでもし物質に対してバシュラールが詩人と同じ価値を持っていたならば、詩人の抱いたイメージをバシュラール自身でいわば追体験することができる。あるいは逆に、詩人の詩的イメージをバシュラールの(無意識的な)価値で表現するならば、自分自身の体験を詩的な追体験とすることができる。『ロートレアモン』のなかでバシュラールはデュカスとの共通の価値(無意識的価値、あるいはこの場合、共通のコンプレックス)を軸に、自分と異なる人生を追体験し、共感したのである。なぜならば、バシュラールがデュカスの詩に求めたのは汎美主義でもなく、配列の美でもなく、美しさを生むエネルギーや力だったからである⁽²³⁾。

価値の共通性とは、言い換えれば、バシュラールの心理投射に他ならない。一つの詩を読んだとき、たまたまそのイメージを構成する(無意識的な)価値が自分の価値と同質だったという場合があるだろうし、また自分の価値を投射しながら一つの詩を読み、そこに展開するイメージをその価値で再構成するという場合もあるだろう。「バシュラールの心理投射」と表現したのは、もちろん後者の方である。彼が自己体験したものをデュカスの詩に投射して、それを詩人の詩的な追体験としたのである。われわれがバシュラールの髪の毛に、過去の暗い強制の思い出やその復讐心を見るのは、このような意味においてであった。従って、ここは「美」(例えば、『水と夢』のあちこちに点在する詩的な美しさ)から遠く離れた現実的な世界、それも遺恨や怨嗟の渦巻く

世界といえるかもしれない。

このような観点からすれば、バシュラールの過ごした学校（コレッジ）生活は、いじめや強制が横行し、精神的に抑圧され、遺恨に満ち、悲しい思い出にあふれた時代、と言えるだろう。

『ロートレアモン』の4年前の作品『持続の弁証法』では、このような暗い少年時代とは正反対の世界が描かれていた。人間の不幸の原点を少年時代に求める精神分析の学説とは反対に、よろこびと可能性に満ちあふれ、創造的な生のリズムの源泉として「永遠の少年時代」を語った⁽²⁴⁾のである。この作品のなかの少年時代は絶対なる生のよろこびの基礎を育むものだった。また20年後に出版された『夢想の詩学』では、「幸福な少年時代」、「永遠の少年時代」を描くために一つの章を掲げた⁽²⁵⁾ほどである。

本来のバシュラールの思想では、それほどまでに幸福な思い出に満ちあふれる少年時代だったはずである。つまり、「幸福な少年時代」を核に夢想の詩学を展開してゆくのがバシュラールの想像力研究であるが、そのなかにあって『ロートレアモン』はまるで例外のように、異端のように見える。しかし仔細に検討してみると、かならずしも矛盾しているわけではない。少年時代が幸福なのは、世界に投げだされる前だからであり、生誕の家にこもっているからであり、また、孤独のなかで夢見ることができるからである。このような自分中心の世界に息づく幸福な子供に、大人たちは客観性を押しつけ、社会性を詰めこみ、大人の心を準備させる。「こうして子供は家族や、社会や、心理的な衝突の領域に入ってゆくのである。彼は未熟な大人になるのだ。この未熟な大人は抑圧された少年時代の状態にあるのと同じである。」⁽²⁶⁾

デュカスの学校生活、すなわちバシュラールのコレッジ生活は文字通り「抑圧された少年時代の状態」だった。孤独が好きな少年バシュラールに社会性を詰めこみ、なかんずく理性を強要しようとしたのが、コレッジの先生だったのである。彼にとって最初の心理的衝突、人間関係の衝突の場が学校だったのかもしれない。

このような悲しい思い出に満ちたデュカスの学校生活のなかにあって、もし唯一救いがあるとするならば、輝くような時間があるとするならば、それは「数学の讃歌」である。バシュラールによると、彼には数学の才能があり、数学について述べたときは暴力や復讐心から離れて、自らを落ちつかせ、自らを高揚させるページになる、という⁽²⁷⁾。デュカスの数学的な魂が生の中の衝動を消滅させ、孤独のなかで自己を注視させ、生とは別物の抽象的な魂を創造させる。数学への頌歌が生希望になるのである。

この精神の高揚もまた、そのままバシュラール少年の追体験とみなすことができるだろう。学校の教育的な数学を押しつける教師のことを暴力教師と蔑みながらも、数学的な魂のすばらしさを語り、そこに唯一の希望を見出している⁽²⁸⁾からである。おそらくバシュラール自身、学校での押しつけ数学を嫌いながらも、数学が好きで、また数学の才能にも恵まれていたのだろう。郵便局に勤めながら十年後独学で学士を取得できたのは、先にも触れたように、この数学という学

間のおかげだったのである。『ロートレアモン』における数学への思い入れを考えると、彼は数学がよほど好きだったのだろう。おそらく、悲しい時間がいっぱい为学校生活のなかで、数学への信頼だけが魂の抛り所、幸福の原点になったものと思われる。

ここではバシュラルの『マルドロールの歌』の分析結果を可能なかぎりバシュラル自身の追体験として再構成してみた。あるいは逆に、バシュラルの過ごしたコレージュ体験を『マルドロールの歌』に投射して、デュカスにそれを追体験させた、というべきだろうか。いずれにしても、こうした行為が曲解にあたると言われないうえにも、一つ付け加えておきたいことがある。それは「体験」という主観的な行為を離れ、純粹にイメージを分析し、それを言語によって表現した個所が『ロートレアモン』には数多くある、という明快な事実である。例えば、カフカとロートレアモンの変身行為の分析であり、純粹意思の象徴として取り上げた爪の詩的イメージの分析であり、言語のアンチテーゼとして行われた筋肉と叫び声の分析である。

そうした詩的表現をここではすべて除外したつもりである。しかし、バシュラル自身の体験した学校嫌いや先生嫌いがデュカスの詩的イメージにどれほど決定的な価値を与えたのか、『マルドロールの歌』全編を一人の先生への反動から書いた⁽²⁹⁾とまでバシュラルに言わせたのはこの（無意識的な）価値付けのせいではないのか、とわれわれは考えるのである。少なくとも、想像力を特定のイメージに変形させなければ出てこない詩の構造であったと断定しても差しつかえないであろう。

『空間の詩学』以降、バシュラルはいっそう自分自身の夢を詩人のイメージに混ぜ合わせ、そうやって自分の考え方の根拠を示すようになった⁽³⁰⁾とされている。バシュラル研究では何ごとにおいてもよく『空間の詩学』が一つの境目として取り上げられるが、この場合、「いっそう」という副詞があるので、かろうじてその論拠が成立するといつてよいのかもしれない。それというのも、『火の精神分析』以来彼は自分の夢や体験をどの作品のなかでも語っており、必ずしも『空間の詩学』以降とは断定できないからである。ただ「いっそう」という「数」の問題になると、『空間の詩学』以前の数と以降の数を数えた研究がないので明確に断言をすることができない。「そうかもしれない」と曖昧にうなずくほかはないだろう。

ところで「自分自身の夢」とはバシュラル自身の過去のことであり、彼の描いた過去はほとんどが故郷の美しさ、懐かしい父親のしぐさ、子供の頃の心地よい夢など、いわば良い体験をイメージした夢である。繰り返しになるが、この良いイメージの夢は『火の精神分析』から『ろうそくの炎』まで、数の問題はともかくとして、一貫して語られていることに間違いはない。しかしながら、反対の、いわゆる悪い体験についてバシュラルはほとんど何も語っていない。本来ならば無意識的に行われるほど強く価値付けされた夢には両極端の二種類がなければならぬ。美しいイメージに対して醜いイメージ、懐かしいイメージに対して思い出すのも嫌な

イメージ、心地よいイメージに対して不快なイメージが同時に存在するはずである。このような、いわば負のイメージを展開する場があるとすれば、それは『ロートレアモン』を除いてほかにはないだろう。『ロートレアモン』の世界は数学への讃歌だけが救いで、あとは神経質でびんと張りつめ、出口のない迷宮に入り込んで、ことばにならない叫び声を上げているような、暗い世界の詩的イメージが続くのである。

もちろん、バシュラールのいわゆる裏側からのこのような心理投射が彼のイメージ分析の意味合いを弱めたというつもりはないし、想像力研究の価値を減少させたというつもりもない。ただバシュラールというと、一般に美しい詩的な世界、温かい心づかい、やさしい微笑み、現実離れた魂、穏やかな自然など、明るい世界を連想させるが、それだけではない、と言いたかったのである。『水と夢』や『大地』の二つの著作に描かれている、シャンパーニュ地方の大自然に育まれたバシュラールの少年時代を「正のイメージ」と表現するならば、『ロートレアモン』に描かれている暗い追体験は「負のイメージ」と言いあらわすことができるだろう。バシュラールの世界はいま描いた暗い過去の根も持っている。そのような、いわば「負のイメージ」を内包することで、むしろバシュラールの詩的世界が深く、豊かに、大きくなるといったならば、それは言い過ぎになるだろうか。

註

- (1) LESCURE, Jean: 《Bachelard à l'école》, in *Bachelard aujourd'hui*, Paris, Clancier-Guénaud, 1986, pp. 15-41.
- (2) BACHELARD, G.: *Lautréamont* (nouvelle édition), José Corti, 1979.
- (3) *Ibid.*, p. 154.
- (4) BACHELARD, G.: *Le nouvel esprit scientifique*, P. U. F., 1971.
- (5) *Lautréamont*, p. 30.
- (6) *Ibid.*, p. 31.
- (7) *Ibid.*, p. 86.
- (8) *Ibid.*, p. 90.
- (9) *Ibid.*, p. 118.
- (10) *Ibid.*, p. 119.
- (11) BACHELARD, G.: *La Psychanalyse du feu*, Gallimard, 1972. pp. 20-21. pp. 33-34. pp. 140-141.
- (12) *Lautréamont*, p. 9.
- (13) *Ibid.*, p. 16.
- (14) *Ibid.*, pp. 60-61.
- (15) Cf., *ibid.*, chapitre III.
- (16) *Ibid.*, pp. 65-66. “Comment une éducation arbitraire, où le professeur se nourrit 《avec confiance des larmes et du sang de l'adolescent》, ne laisserait-elle pas au cœur du jeune homme d'inexpiables rancunes?”
p. 93. “la sévérité est une psychose ; c'est, en particulier, la psychose professionnelle du professeur. … Si le professeur de rhétorique — est sévère, il est, du même coup, partial.

Aussitôt, il devient un professeur automate. On peut donc se garder facilement de sa sévérité! Sa sévérité ne réussit pas. L'élève vigoureux a mille moyens pour amortir ou faire dévier la sévérité de son maître.”

- (17) *Ibid.*, p. 62.
- (18) *Ibid.*, p. 65.
- (19) *Ibid.*, p. 64.
- (20) MARGOLIN, Jean-Claude : *Bachelard*, Seuil, 1977.
- (21) *Lautréamont*, p. 125.
- (22) BACHELARD, G. : *L'Eau et les rêves*, José Corti, 1979, 「血の水」については pp. 83-84.
「母乳」については pp. 165-166.
- (23) *Lautréamont*, pp. 103-104.
- (24) BACHELARD, G. : *La Dialectique de la durée*, P. U. F., 1972, p. 149.
- (25) BACHELARD, G. : *La Poétique de la rêverie*, P. U. F., 1974, Cf. chapitre III.
- (26) *Ibid.*, p. 92.
- (27) *Lautréamont*, p. 90.
- (28) *Ibid.*, pp. 93-94.
- (29) *Ibid.*, p. 94.
- (30) LESCURE, Jean : 《Introduction à la poétique de Bachelard》, in *L'Intuition de l'instant* de G. Bachelard, Gonthier, 1971, p. 144.